一生一度のたのみごと

蓮見麻衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一生一度のたのみごと

【Ｎコード】
Ｎ７０３０Ｇ

【作者名】
蓮見麻衣

【あらすじ】
受験も終わり心機一転、新しい学校で、新しい友達ができたのぞみは、ある日クラスメートからおかしなお願いをされて――――。
少女マンガ風、ときめきラブストーリー。

＊1　プロローグ

「あれ。……橋本のぞみさん、でオーケー？」
桜も散って、やっと学校にも慣れてきて、新しい友達ができたころ。
「うん。えーっと……新城くん、だよね」
クラスではじめての席替えがあった。

「あれ？　よく覚えてたね、俺の名前」
夏樹は目を丸くした。
「覚えてるよ。自己紹介、すごいインパクトあったもん」
「そう？　じゃ、“ジョナ”って呼んで」
夏樹は人懐っこい笑顔を見せて、嬉しそうに答える。
意外といい人かも、とのぞみは思った。
自己紹介のときはもっとやる気なくて、あんまり笑ってなかったし、
ふてくされてるようにも見えたけど……
いい席に当たったかもしれない。
のぞみはようやくほっとして、肩の力を抜いた。

「なんかイメージ違うね」
もっと無愛想で、女子になんて話し掛けなそうなイメージがあった。
「何が？」
「意外と話しやすそうだなって思って」
「そう？」
夏樹は軽く答えて辺りを見回した。周りの皆も新しく近くの席になった人に自己紹介やらアドレス交換やら、好き勝手なことをしている。
アドレス交換しよっか。
夏樹ならいいかと思い、のぞみは鞄から携帯を取り出して顔を上げた。

そのとき突然、夏樹が真剣な顔をした。
「……新城くん？」
どうしたの、と問おうとしたのを手で遮られた。
「ちょっと、お願いがあるんだけど」
何。なんでそんな小声で囁くの。
夏樹はそのまま近付いてきて、周りを伺いつつ手を合わせて頼んできた。

「俺に恋させてください！」

＊2　おねがい

「……。……はぁ！？」

のぞみは慌てて周りを窺った。

……セーフ。誰も聞いてない。皆自分たちの自己紹介に夢中。

落ち着け落ち着け。

「……ダメ？」

「ダメっていうか……どういう意味、それ」

「どういう意味って……」

聞かれた夏樹は、とんでもないことを語り出した。

「俺、好きな子できるのってほんとに幸せなことだと思うんだ。恋するってほんとにいいことだと思う。つまり、……橋本さんになら恋してもいいなって思って」

照れながら言う夏樹を見ていたら、混乱に拍車がかかった。

なに、それ。

早口で聞き取りづらい長ゼリフをようやく自分の中で翻訳する。つまり？

「……あのさ。それ、言われる方にとってどんだけ失礼か分かってる？」

「なんで？」

「だって、つまり、恋できれば誰でもいいってことでしょ？　……それとも」
たまたま隣の席の私がタイプだったとか？
いや、そうだとしたら今こんな風に言わないで、普通に恋すればいいんだよ。うん。
勝手だ。自己チューすぎる。
夏樹は頭に？マークを浮かべて言った。
「いや……他の子でもいいってわけじゃないよ」
「え？」
……なんでそんなへらへらしてるの。
「うん、橋本さんだからいいなって思ったんだ」
だからなんでそんな軽くそんなことが言えるの。
のぞみは夏樹から目を逸らした。
「新城くん」
「はい？」
「それ、冗談として聞いとく。……冗談にしてもちょっと失礼だと思ったけど、ほぼ初対面だからスルーしとく」
「え、いや、ちょっ……」
のぞみは我慢できずに立ち上がって、窓際で寛いでいる友達の方へ走った。

＊3　ジョナ

平沢紀香は、窓にもたれ掛かって外を眺めていた。
緑がいっぱいで、桜吹雪が綺麗だ。窓は綺麗に磨かれていて、外の木々に触れそうな気がする。
その反射した窓に、百面相をしながらこちらに向かう橋本のぞみが映っていた。

紀香は、突然やってきたのぞみがどこか苛々しているのを見て、のんびりと首を傾げた。
「のぞみちゃん？　どしたのー？」
嫌な人が隣になった？　と聞く紀香に、のぞみは首を横に振った。
「嫌なヤツじゃないんだけど……」
むしろ最初は好意すら抱いたんだけど。
「……ちょっと変な人で」
事の次第は話せない。
初対面で告白以前の告白もどきをされました、なんて。
「隣、誰？」
「……新城くん」
あ、“ジョナ”かぁ。と紀香は合点した。
「おもしろかったよね、自己紹介」
「うん……おもしろかった、ケドね」

――――新城夏樹は、登校初日から妙に浮いていた。
少し伸ばした茶髪とだらっとした制服。
顔もそこそこいいので最初は周りの派手な女子がかまっていたけれど、中身が意外と地味なのがわかってからは、相手にされなくなっていた。
登校二日目の自己紹介。
夏樹はいかにもだるそうに椅子から立ち上がった。

「……新城夏樹です」

ナツキかー。小学校のころにそんな名前の女の子いたなぁ。
というのが、のぞみが夏樹について抱いたはじめての感想だった。
そんなのぞみの内心を見透かしたかのように、夏樹はこう続けた。

「ナツキ、って呼ばないでください。女子に間違われるのであんま好きじゃないです。呼ぶなら名字か、」
そこで夏樹は一瞬迷った。

「――ジョナ、って呼んでください。中学んときのあだ名です。以上」

……『ジョナ』。
本人が無愛想だったのが逆にウケた。

ジョナだってぇ、なんかカワイイー。
どこかの女子がそう言うと、みんなが同調した。
それから夏樹は男子のほとんどと女子の半分くらいから、「ジョナ」
と呼ばれている。

＊4　アダナの理由

……その
「お願い」の次の日からの夏樹は、すごかった。

のぞみが朝登校すると、のぞみの席の周りには男子がたくさん集まっていた。
正確には、夏樹の席の周り。
昨日まで浮いててひとりっきりで欠伸をしていた夏樹の周りに、クラスの男子が数人集まっていた。

人だかりの中心で、突然夏樹が
「うあー！」と叫んだ。
「マジで！？　うわ俺それ超勘違いしてたっ」
「お前バカだなー、バカっぽかったけどほんとにバカだったのかよ」
「バカバカ言うな！　……泣くよ！？」
泣くなよ！　と周りの男子が一斉に笑った。

……なんだこの人だかりは。
ぐたっとして生気がなかった夏樹の目は今やキラキラと輝き、髪型も無造作だけどぼさぼさの伸ばしっぱなしではなくなっていた。
制服もそこそこちゃんとしている。
夏樹がのぞみに気付いて笑った。
「あ、橋本さん。おはよ」
「……おはよう。人気だね」
「え？　人気じゃないって全然！」

夏樹はにこにこ笑っている。
……あ。この笑顔は、昨日とおんなじだ。
そう思った矢先に、クラスの男子達が喋りだした。
「にしてもジョナ、お前ってなんで“ジョナ”なの？」
「あ、それ俺も気になってた。でも昨日までのジョナには聞きづらくってさあ」
さて、どこから話せばいいのかな、と夏樹はおどけて言った。
「ちっちゃいころから夏樹ちゃん、夏樹ちゃん、と呼ばれていた俺は、とにかく自分の名前が気にくわなかったワケですよ」
昔話は唐突に始まった。のぞみは鞄を置いて携帯をいじりながら、こっそり話を聞いていた。
「案の定、中学くらいになると本格的にからかわれはじめたから、俺は『ナツキ』って呼ばないでくれ、と周りのみんなに頼んだわけです」
「うんうん。それで？」
「だけど名字だと親しみがない。っていうんで当時の俺の友達の一人が付けたあだ名が“ジョナ”」
夏樹は（男だけど）花が開くような笑顔を浮かべた。
「シン『ジョーナ』ツキ、だからジョナ。結構無理やりだったけど、これ思いついた友達には感謝してる。以上。……ハイ、じゃあ他に俺に質問ある人！」
はーい、と背の高い山口くんが手を挙げた。
「なんでお前、急に明るくなったわけ？　キャラ変？」
正直キモいぞ、という周りのからかいに、夏樹は笑顔で返した。
「んー。……秘密、かな」
「なんだそれ！」
ますますキモい！　と笑う男子の群れから逃げるように、のぞみは廊下に出た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7030g/

一生一度のたのみごと

2010年10月8日23時08分発行